

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月10日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21510279

研究課題名（和文）：インド商業集団（マールワリー）の研究、グローバル経済と地域社会の結節点として

研究課題名（英文）：Study on Marwari Business Communities in India

研究代表者：中谷 純江（NAKATANI SUMIE）鹿児島大学・国際戦略本部・准教授

研究者番号：30530034

研究成果の概要（和文）：本研究では、インドを代表する産業資本家として知られる「マールワリー」に焦点をあてて、南アジア地域社会を捉えなおした。これまでのマールワリーについての研究は、彼らの経済的成功の理由、経済組織の特徴について論じるものが多く、地域社会の歴史的コンテキストに位置づけて彼らを理解する視点が欠けてきた。本研究はマールワリーの出身社会（ラージャスターンの商業町）を拠点に、移住商人の集団マールワリーのアイデンティティや表象について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study reconsidered the Marwari, one of the most successful business communities in India. Previous studies have discussed on the strength of Marwaris in Indian industry and explored the reason for their disproportionate success, but have not understood them in a historical context of the native towns from which they migrated. Based on the field works in towns of Shekhawati, politics of identity and representations of Marwairis are discussed in this study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：移動商人、ラージャスターン、故郷、表象

1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする「マールワーリー」とは、インド・ラージャスターン地方の、特にシェーカーワティー地域を出身地とする商業集団を指す。彼らは16世紀頃から北インド各地や南インドに進出をはじめ、各地に商業活動の基盤を築いた。19世紀後半には主要な貿易港ボンベイとカルカッタ、また綿花やアヘンやジュートを生産する農村地域へ大挙して移住し、植民地経済の発展過程で他の商業集団を圧倒する成功をおさめた。20世紀初頭には近代産業にいち早く投資し、イギリスがインドを離れる際には多くの工場を買収した。独立後には近代セクター資産の半分以上をマールワーリーが握るといわれるまでになり、民間経済における彼らの影響力の大きさはしばしば指摘されてきた。インド最大といわれたビルラー財閥は、シェーカーワティー地域ピラニの出身であり、本研究であつかうマールワーリーの代表格といえる。現在、世界の鉄鋼王として知られるミッタルの祖先もまた同地域ラージガルの出身である。

これら「マールワーリー」の強さの秘密、成功の理由の解明が先行研究における中心テーマとなってきた。例えば、マールワーリー研究の金字塔ともいえる **Timberg** の研究は、マールワーリーの移動の歴史や経済活動について分析し、彼らの特徴として、合同家族による財の管理システム、全国にひろがる信用ネットワーク、投機を指摘した。これらの特質は伝統的職業に由来し、マールワーリーは信用とリスクに慣れており、それらに適応した制度や態度を発展させてきたとされる[1978: 40]。先行研究には、このようにマールワーリーの特質を明らかにしようとする本質的議論が多く見られ、地域社会

の歴史的状況や政治経済的コンテクストに位置づけて移動商人を捉える視点が欠けてきた。マールワーリー商人は、南アジア各地に遍在し、誰もがその存在や影響力の大きさを知っているにもかかわらず、経済的成功やビジネスの才能ばかりが注目され、民族誌的にその全体像を把握する試みが十分にはなされてこなかったといえる。

応募者はこれまで人類学的アプローチによってラージャスターン農村社会の研究をおこなってきた。主な関心は、近代化による社会変動を権力構造の変化から捉えることにある[中谷 2009, 2008a, 2002, Nakatani 2004, 2000]。ラージャスターン地域は、独立以前まで藩王国の支配下であり、その歴史は「ラージプート（王族）の土地」というその名の通り、7世紀頃にこの地を支配したラージプート諸王朝の興亡の歴史として描かれてきた。しかし、申請者のこれまでの研究から明らかになったことは、土地の支配者層と商人層の関係の重要性であり、両者の拮抗関係である。例えば、藩王国は、商業活動からもたらされる税収によって潤っただけでなく、商人階層から多くのお金が戦費を賄うために支配者に流れていた。しかし、商人たちが戦争から直接利益を得ていたという事実は知られておらず、地域社会における支配者と商人との関係は興味深い。

よって、申請者は土地支配を中心に南アジア社会を論じる従来の傾向を再考するため、17世紀後半から18世紀にかけてラージャスターン各地に形成された商業町、及びその主要なアクターである商人の研究に着手した。平成18-21年度に、科学研究費補助金[基盤A]「南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究」（研究代表者・三尾稔・国立民族学博物館）に研究協力者として参与し、商業町の形成プロセ

スやその変容について分析をおこなった。物理的空間としての商業町自体の変容プロセスを明らかにする研究をさらに発展させる形で、商業町の主な経済活動のアクターである商人に焦点をあてる本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的として、以下の二点をあげることができる。第一に、商業集団に焦点をあてることで、移動を本質とする人々の視点から、地域社会を捉えなおすを試みる。上述したように、土地支配を議論の中心として支配者側の視点から描かれてきた「ラージャスターンの歴史」を、商人の活動について焦点をあてながら再考する。第二に、「マールワリー」とよばれる商業集団の発展期の姿を、そのアイデンティティの臍帯が付着する地域との関係を「起点に」捉えなおすを試みる。これまでの「マールワリー」に関する研究は、移動先における彼らの経済活動に注目したものが多かった。多くの関心は、彼らの経済的成功の理由を論じることにあつたといえる。ビジネスに有利に作用したコミュニティの特質として、彼らの故郷ラージャスターンの不利な生態的環境において培われた「投機精神」や、独自のアカウントシステム、広範な信用取引（フンディー）ネットワークの存在、そして、ビジネスの拡大や多角化をたやすくする合同家族制度などが指摘されてきた。これらの研究が彼らの経済活動に焦点をあて、それを支えるシステムを明らかにしたのに対し、本研究は富をどのように消費したのかについて考察する。また、19世紀後半から20世紀初頭という時期、つまり、ラージャスターン出身の商人たちが故郷を離れ、インド各地でビジネスに従事することを通してイギリスの植民地支配を支え、

経済力を増してゆき、のちには国民会議派を資金的に支えるなど、国家的な影響力を行使するまでに成長する時期に焦点を当て、「マールワリー」の存在が、彼らの故郷ラージャスターンの人々にとって、あるいは移住先の人々にとってどのように映ったのかという問題と、彼ら自身が地域社会の人々に対して、自らをどのように提示しようとしたのかという問題について考察する。まとめるなら、①マールワリーの視点から地域社会をとらえなおすことと、②地域社会を起点にマールワリーを捉えなおすことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者（中谷）と二人の研究協力者（小松・豊山）の共同研究として実施した。中谷は、社会人類学的なアプローチに基づき、ラージャスターン州シェーカーワティー地域の商業町でフィールドワークをおこなった。マールワリーの社会経済活動、特に、彼らが商業活動によって得た富をどのように消費したのかに注目し、人々へのインタビュー及び文献調査により、(1)支配者との関係、(2)地域社会の人々との関係、(3)商人コミュニティ内部の社会関係を考察した。

美術史を専門とする豊山は、マールワリーたちが故郷の商業町に建てた邸宅（ハヴェーリー）に描かれた壁画について分析をおこなった。シェーカーワト地域の壁画は、西洋人観光客の間で人気をあつめ、近年は観光遺産として注目されている。しかし、多くのハヴェーリーは、シェア・ホルダーの意見が一致せずに売却ができず、また修理もされないまま放置された状況にある。豊山は、壁画を通して邸宅の所有者マールワリーが自

らをどのように提示したかったのかという問題と、地域の人々がどのように彼らを見ていたのか、という2つの視点の「ずれ」を明らかにすることを試みた。

小松は、20世紀初頭に北インドで発刊されたヒンディー語雑誌の「マールワリー特集」を分析し、移住先である北インドの人々の目にマールワリーがどのように映ったのかと、その特集号に対する社会的批判、マールワリー・コミュニティ自身による激しい反発について考察した。

4. 研究成果

中谷の研究は、シェーカーワト地域の商業町、チュールを事例に、成功したマールワリーたちが商業活動によって得た財をどのように消費したのか、富を社会資本に転換する方法について明らかにした。具体的には、商人が支配者に対しておこなった贈与、地域社会に対しておこなった慈善事業、「故郷」に建設した邸宅（ハヴェーリー）について取り上げ、(1) 支配者との関係、(2) 地域社会の人々との関係、(3) 商人コミュニティ内部の社会関係を考察することを通して、「マールワリー」にとっての「故郷」の意味について論じた。

豊山の研究は、マールワリーたちが故郷の商業町に建てた邸宅に描かれた壁画を分析し、ハヴェーリーが建造者マールワリーにとって、在地の権力者や植民地権力、取引関係にある外国人など、様々な人による自己にむけられた視点を内部に照射した上で、自らの正当性を主張する装置であったと捉えた。そして、自己表現の1つの手段である壁画デザインの時代による変化に注目し、彼らの自己表象の変容について論じた。そして、壁画デザインの変容は、マールワリーの自

己表象に文化的正当性を与える外的要因の変容と結びついていたことを明らかにした。

小松は、20世紀初頭に北インドで発刊されたヒンディー語雑誌の「マールワリー特集」をもとに、移住先である北インドの人々の目にマールワリーがどのように映ったのかを分析し、その特集が生み出された社会背景について明らかにする。また、特集号に対する社会的批判、マールワリー自身による激しい反発を併せて考察することで、移住先の北インドで構築された他者イメージとマールワリー自身が作り上げようとした自己イメージとの「齟齬」、コミュニティとしてのアイデンティティ構築の問題について考察した。小松は、GD ビルラーやジャムナーラール・バジャーズに代表されるような成功したマールワリーたちが「シンプル」な生活を好み、独立運動への経済的支援を継続しておこなった背景に、外から貼り付けられた「享楽瀟洒」というイメージを払拭するとともに、先進的「コミュニティ」としての新たなイメージを構築しようとする努力を読み取った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① Nakatani, Sumie. "Native Towns of the Marwari, a Diasporic Trading Community in India," In Yamane ed. *Regional Routes, Regional Roots? Cross-Border Patterns of Human Mobility in Eurasia*. Discussion paper, Comparative Studies on Regional Powers. 査読無, forthcoming

② 中谷純江 「『故郷』への投資：ラージャスターンの商業町と移動商人マールワーリー」『現代インド』No.3, 査読有, 投稿中

〔学会発表〕(計3件)

① Nakatani, Sumie 'Investing in "Home": Marwari Mobile Merchants and their Native Towns in Shekhawati, Rajasthan.' British Association for South Asian Studies, held at SOAS, London, 2012 April 12-14.

② 中谷純江 「故郷への投資—ディアスポラ商業コミュニティ、マールワーリーの経済活動」日本南アジア学会、2011年10月2日(大阪大学)

③ 中谷純江 「19世紀後半から20世紀初頭

の地域社会におけるマールワーリー・プレゼンス」日本南アジア学会、2011年10月2日(大阪大学)

〔図書〕(計1件)

① 中谷純江(2011), 「マールワーリーの故郷、ラージャスターン」, 『インド ポピュラー・アートの世界—近代西欧との出会いと展開』三尾稔・福内千絵編、国立民族学博物館, pp.22-23

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷純江 (NAKATANI SUMIE)

鹿児島大学・国際戦略本部・准教授

研究者番号：30530034

(2) 研究協力者

① 小松久恵 (KOMATSU HISAE)

北海道大学・スラブ研究センター・研究員

研究者番号：80552306

② 豊山亜季 (TOYOYAMA AKI)

国立民族学博物館・外来研究員

研究者番号：40511671